

学会抄録

第32回千葉医学会総会演説要旨

(昭和30年11月19日 於附属病院屋階大講堂)

1. 野兎病菌の増殖と形態に関する研究

野兎病化学療法の基礎的研究として(第2報)

桜井信夫(細菌) 森谷恵(天津・村上病院)

各種抗生物質の野兎病菌に対する作用型式をブドウ糖・チスチン・豚肝ブイヨン(SL-broth)中で振盪培養、混濁度測定により追及、電子顕微鏡で形態変化を観察し、次の結果を得た。

第I型薬剤 ストレプトマイシン—作用後直ちに分裂を抑制し、2 mcg/ml で溶菌せしめ、菌体は膨化した後内容融出。アイロタイシン—作用型或ストマイに略々同じ、但し溶菌は約30時間後、形態変化は他のいずれの抗生物質とも異なり、著るしい多形性を来す。20~40 mcg/ml で発育阻止、クロラムフェニコール、第I型と第II型の間中型(効果は第I型、型式は第II型)。形態変化は菌体の膨大。

第II型薬剤 テトラサイクリン系薬剤、いずれも作用後暫らくして増殖を抑制、添加薬剤濃度に従つて或る潜伏期の後、発育再開、対照培養と等しい濃度に達す。形態変化は菌体の膨大。20~40 mcg/ml で発育停止。臨床実験によりアイロタイシンの効果が試験管内実験よりの予想と一致せる事を報告した。

2. 新潟県に発生せる「イカ食中毒」の原因に関する基礎的研究

柳沢文徳、竹内端弥、豊浦秀世
志賀信雄、川島裕博(腐研)

数年前より新潟市内において新潟県沖合で漁獲される「イカ」による食中毒が発生しているが、特に本年はその発生例が多い。又その原因、成因に就て従来考えられている食中毒とは全く異なるものであると見做されている。

私共は所謂腐敗中毒という見解より研究を進めているが、新潟県の「食中毒イカ」に有害物質(仔猫の腹腔内注射による嘔吐の発症)の存在することを

確認した。

この抽出液に就て人体実験を試みたところ食中毒の定型的な発症は認められぬが、軽度の中毒類似症状を起し得た。

本物質がこの食中毒に密接な関係があるものと考え、食中毒学的検討を行つた成績を第1報として報告する。

3. 腸球菌によるエンテロトキシン産生について

藤原喜久夫、関谷武光、番場和夫(衛生)

演者等は下痢腸炎患者の糞便より分離せる腸球菌2株の Dolman 濾液中にエンテロトキシン様毒物の産生をみた。

1) 此等の2株は10°C、45°C 共に増殖可能であり、β溶血を起し、リトマス牛乳にて、酸生成カゼイン凝固、消化が認められ、リトマスは急速に還元される。又 Mannitol, sorbitol を分解する。以上の諸性状より Streptococcus zymogenes と同定された。

2) 加熱濾液50 cc 宛牛乳中に混じて人体に飲用せしむると、急性胃腸炎症状を呈する。

3) 本毒物は蛋白質及び多糖質の共存により、その作用を現す。

4) 上記各成分を夫々加水分解して、ペーパークロマトグラフィーを行つた結果、ブドウ球菌のそれとは異なることが知られた。

4. 鉤虫の職業別、年齢別、及び性別の感染状況についての研究(第1報)

吉野常男(公衆衛生)

房総半島西南端の館山市西岬地区に於て、鉤虫の調査を実施した。

此の地区は、海に突出した小岬で、周囲を海に囲まれて、所謂半農半漁の生活形態を有し、主として農業と漁業とに依り生計を立てている。従つて同一